

## オルガノン要約 § 155～166

§ 155 正しいレメディは重い症状を起こさない。なぜならレメディに類似した病気のみに関与するからである。レメディは病的ではない部位に関与することはできない。

§ 156 しかし最適なレメディでも気づかない程度の軽い症状は現れている。なぜなら病気とレメディが完全に一致することはありえないから。それでも回復する。

§ 157 投与量が正しければすみやかに病気を根絶できる。  
いくぶん多すぎれば悪化が起こる。これはレメディの病気（プルービング）である。

§ 158 レメディによる一時的悪化は非常に良い徴候である。なぜならレメディは治癒すべき病気よりも少し強くあるべきだから。

§ 159 急性病の場合は、レメディの投与量が少なければ少ないほど、最初の数時間で現れる悪化はそれだけいっそう軽くすみやかになる。

§ 160 レメディを微量にできなかった時代は症状の改善を起こすことができず、完全に治癒することはできなかった。

§ 161 急性症状の時は、一時的悪化は 1～数時間で現れる。慢性病や重疾患の時は投与するたびに少しずつポテンシーをアップする方法（§ 247）ならば悪化は起きず、最終段階の時だけ現れる。

§ 162 マテリアメディカが不完全なレメディを使用しなければならないこともある。

§ 163 しかし不完全にしか適合させることができないレメディでは完全な治癒を期待できない。

§ 164 最適なレメディ（特徴的なものがマッチしている時）によるホメオパシー的症状は、治癒作用に害を及ぼさない。

§ 165 SRP の合っていないもの、つまり一般的な症状に対して処方したレメディが良い結果を出すと期待してはならない。

§ 166 現在、レメディは十分存在しているのでそのようなことは稀なことである。実際に正しくないレメディを処方したとしても、より一層類似したレメディを選べば、その被害は軽減される。